

くるるん

おおき循環センターへのアクセス



くるるんのロゴマーク



おおき循環センターくるるんの文字は、親しみやすい丸みを帯びたひらがなを用い、自然・エコをイメージして緑色としました。

循環の環と施設の丘を表現したオレンジの帯は、Energy (エネルギー)、Ecology (環境)、Economy (地域経済の活性化) の頭文字のEをアレンジしています。

くるっちと仲間たち



物知りおばあちゃんと孫娘の“る”ちゃん

大木町に暮らす物知りおばあちゃんは“くるっち”が最初に出会ったお友達。孫娘のるちゃんはくるっちと大の仲良しです。

バクテリアーズ

くるっちの従者、バクテリアーズは土の中のバクテリアの化身。

おおき循環センター

くるるん

ごみを資源として活かす
循環のまちづくりの拠点



おおき循環センターメインキャラクター 土の妖精 くるっち

土の妖精“くるっち”は、きれいな空気、きれいな水、緑の木々が大好き。自然を愛する町の人々も大好きです。そして、忘れてはいけない事“くるっち”は私たちの命の大地を守っているのです。

70% 小売合算 30% 町民 (頭務)



発行：おおき循環センター
住所：〒830-0405 福岡県三潁郡大木町大字横溝1331-1
電話：0944-33-1231 FAX：0944-33-1232
ホームページ：<http://kururun.jp/>



ごあいさつ

大木町長
石川潤一

大木町では、ごみの資源化や、太陽光などの自然エネルギー普及など、環境にやさしい循環型の地域社会づくりを目指してまいりました。

おおき循環センター「くるるん」は、循環のまちづくりの拠点として、平成18年11月にバイオマスセンターがオープンし、町内から発生する生ごみやし尿・浄化槽汚泥などを、町民の皆さんとの協働で、エネルギーや有機肥料として地域の中で循環活用しています。

また、平成22年4月には、インフォメーションセンターや農産物直売所、地産地消レストランを備えた、道の駅おおきがオープンし、大木町がめざす循環のまちづくりの拠点が完成致しました。

私たちは「子供の時代につけを残さない地域社会づくり」を決意し、町民の皆さんと心を一つにして取り組んでいく所存です。今後とも関係各位のご協力をお願い申し上げます。

おおき循環センター「くるるん」は、バイオマスセンター(メタン発酵施設や学習施設)と道の駅おおき(JA福岡大城農産物直売所 くるるん夢市場、健康地域応援レストラン デリ&ピュッフェくるるん)からなっています。

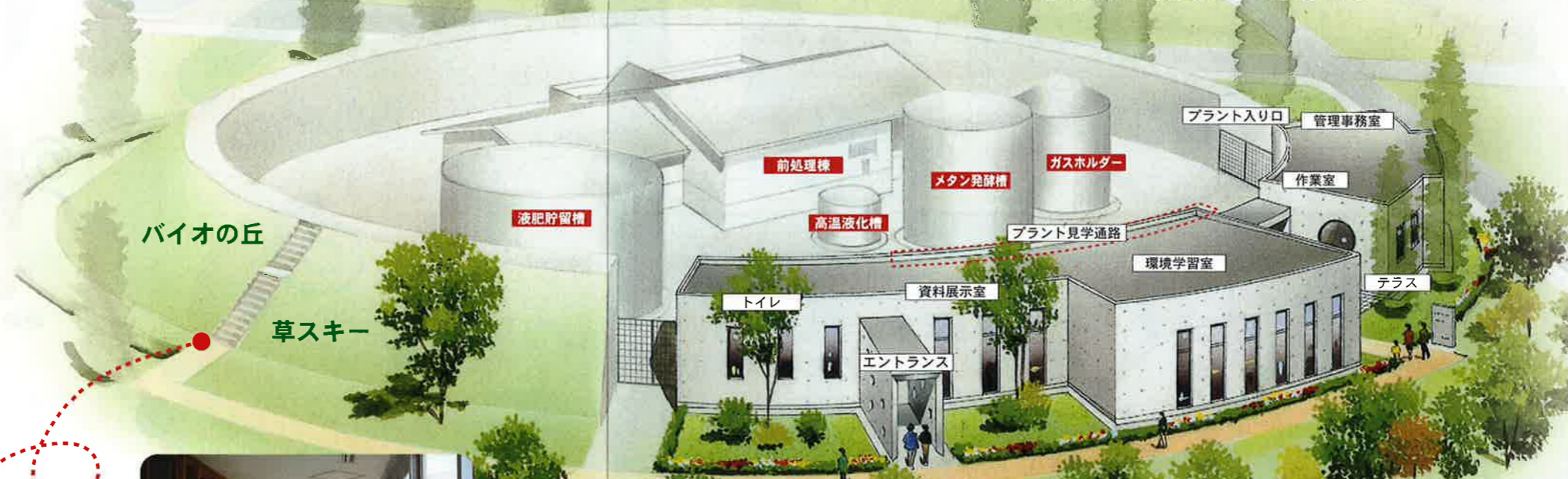


くるるん農園

おおき循環センター バイオマスセンターを 紹介します。

「くるるん」の センターを

バイオマスセンターは従来型のごみ処理施設とは違い、生ごみなどをバイオマス資源として、積極的に地域において循環利用するための施設です。更に、循環のまちづくりの拠点として、循環型社会や自然環境に関する学習をしたり、豊かな地域の食材を提供したり、地域住民の皆さんが憩い・集うための施設です。



バイオの丘

草スキー



プラント見学通路



資料展示室



環境学習室



インフォメーションセンター



農産物直売所「くるるん夢市場」



地産地消レストラン「デリ&ピュッフェ くるるん」

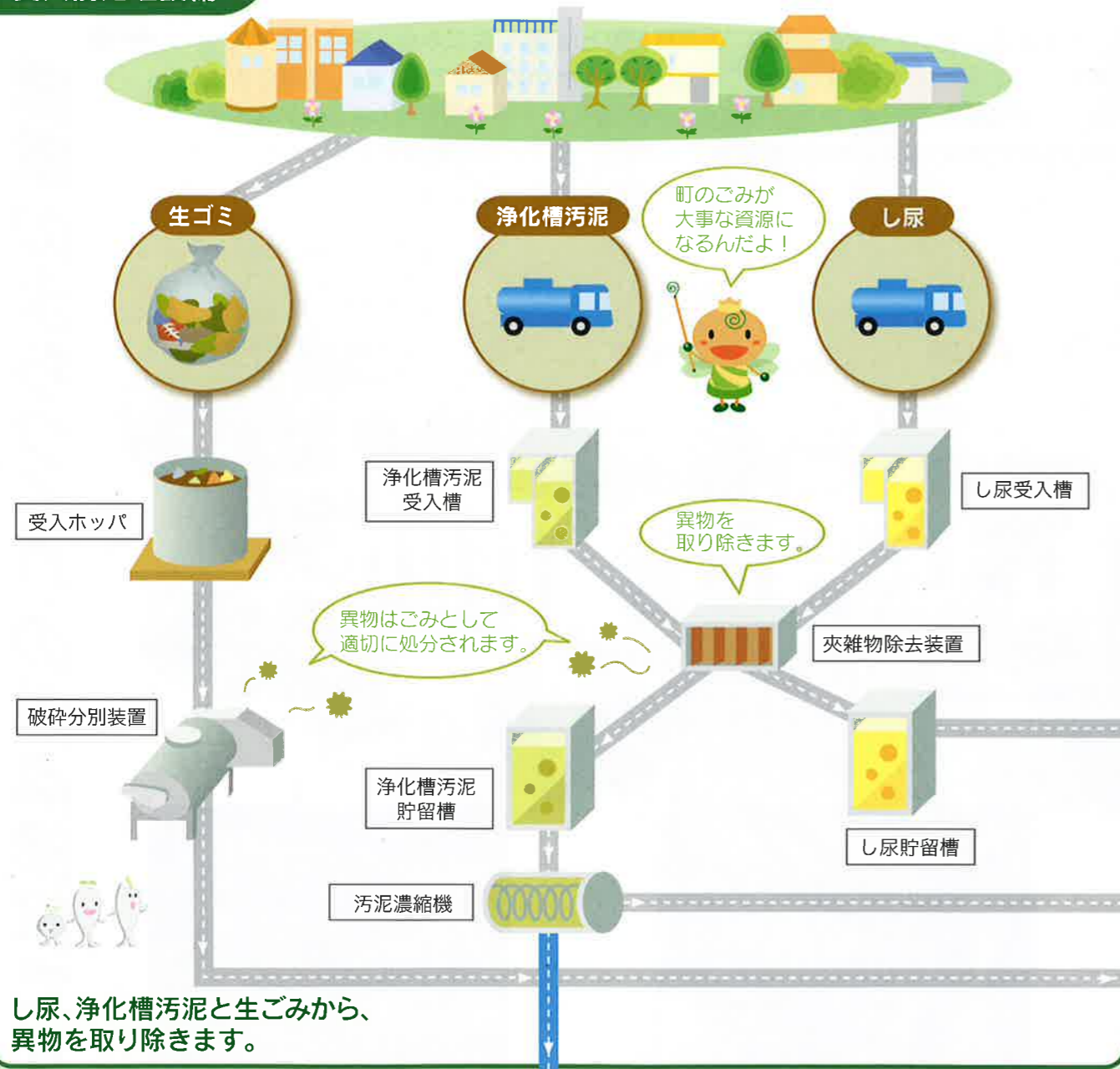


おおき循環センター「くるるん」は循環のまちづくりの拠点施設です。

おおき循環センター「くるるん」バイオガスシステム



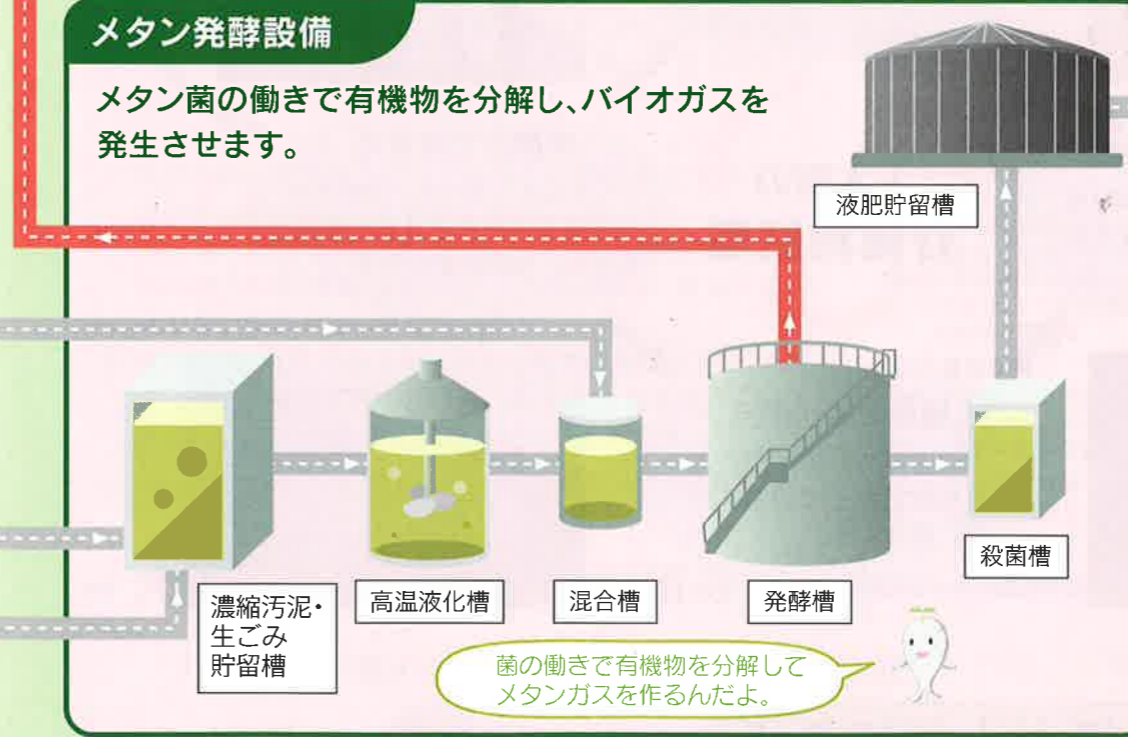
受入前処理設備



エネルギー利用設備

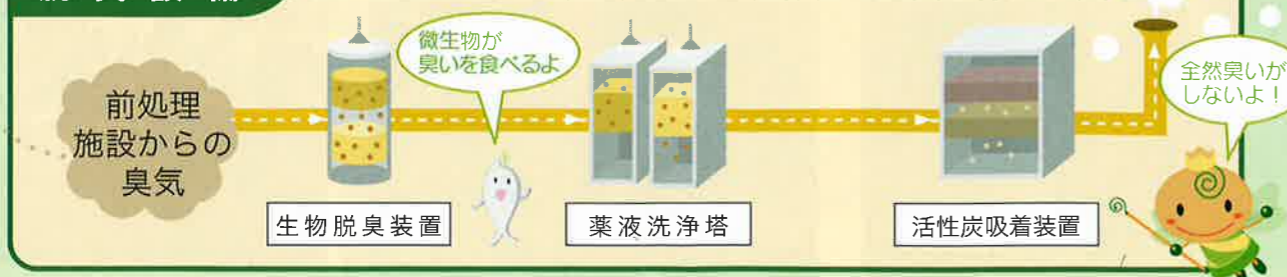


メタン発酵設備



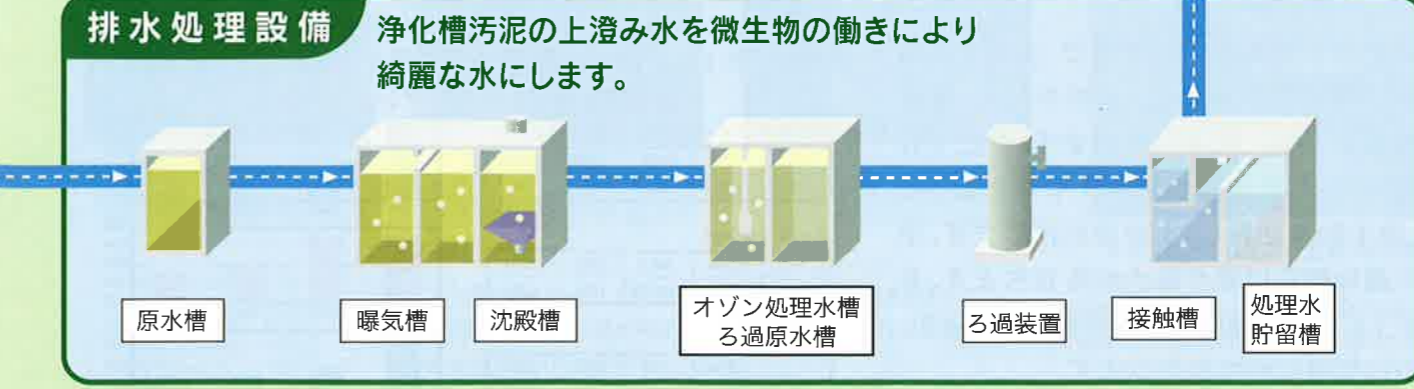
脱臭設備

微生物の働きと活性炭によって施設内の脱臭を行います。



排水処理設備

浄化槽汚泥の上澄み水を微生物の働きにより綺麗な水にします。



温水



電力



液肥



再利用水



大切な自然と資源は未来世代からの預りもの！

大木町がめざす循環

少し前まで、生ごみは大川市清掃センターで焼却していました。また、し尿や浄化槽汚泥は海洋投棄を行っていました。焼却や埋め立て、海洋投棄などのごみ処理は、環境への影響や処理費用負担が大きく、もう限界です。大木町では住民の皆さんとの協働により、これらのものを何一つ無駄にしないで、地域の中でエネルギーや肥料として循環利用します。



生ごみの分別
町内家庭の台所や学校給食から出る生ごみを分別



し尿・浄化槽汚泥

大木町の有機物循環

地元農産物の供給
バイオガス液肥や堆肥を使った農産物を給食や家庭の台所へ

発酵させ資源化
“くるるん”でメタン発酵させ、バイオガスをエネルギー利用した後、有機液肥を作る

液肥の農地還元
バイオガス液肥は優れた有機肥料として田んぼや畑に散布する

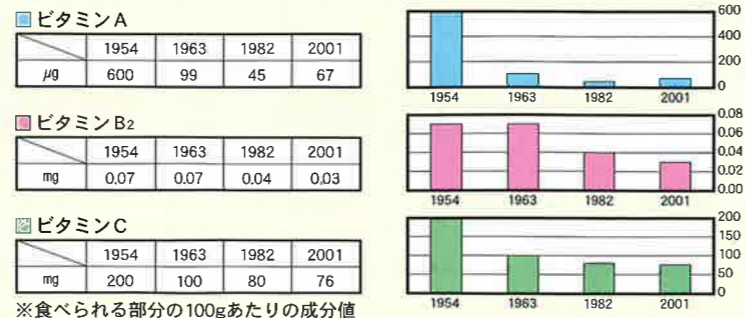


野菜の栄養価が大幅に低下 ~ピーマンのビタミンAが10分の1に~

化学肥料や農薬の使いすぎで、土の中の微量元素や微生物が減少し、土がやせて、野菜の栄養価が大幅に低下しています。堆肥や有機質肥料は、微量成分やミネラル分を豊富に含み、微生物を涵養し、土を豊かにします。栄養価の高い野菜は豊かな土から育ちます。有機物を土に返して健康な野菜を育てることが、私たちの健康にもつながります。

「堆肥」だけで栽培していた1954年に比べ、化学肥料と農薬が使われ始めた1962年以降は野菜の栄養価が大幅に下がっています。

食品成分表にみるピーマンの質の低下



『食品成分表』2訂(1954)～5訂(2001)の栄養価の比較 女子栄養大出版部より

のまちづくり



大量消費社会は、地球温暖化をはじめとする深刻な環境破壊や資源枯渇など、未来の世代に大きなつけを残してしまいました。現代を生きる私たちは、自然環境との共生ができ、持続可能な循環社会を作り、美しい地球を未来の世代へ引き継ぐ責任があります。

大木町もったいない宣言

子どもたちの未来が危ない。

地球温暖化による気候変動は、100年後の人類の存在を脅かすほど深刻さを増しています。その原因が人間の活動や大量に資源を消費する社会にあることは明らかです。



私たちは、無駄の多い暮らしを見直し、これ以上子どもたちに「つけ」を残さない町を作ることを決意し、「大木町もったいない宣言」をここに公表します。

- 1、先人の暮らしの知恵に学び、「もったいない」の心を育て、無駄のない町の暮らしを創造します。
- 2、もともとは貴重な資源である「ごみ」の最資源化を進め、2016年(平成28年)度までに、「ごみ」の焼却・埋立て処分をしない町を目指します。
- 3、大木町は、地球上の小さな小さな町ではありますが、地球の一員としての志を持ち、同じ志を持つ世界中の人々と手をつなぎ、持続可能なまちづくりを進めます。

2008年3月11日大木町議会議決



大木町もったいない宣言の考え方

ごみの発生抑制

- 地域でできること
 - ・簡易包装(無駄を省く)、リユースシステム、分別の徹底
 - ・無駄なリサイクルを減らす
- 国や関係機関への働きかけ
 - ・EPR(拡大生産者責任)の制度化、ディポジットの制度化、炭素税の導入等

ごみの資源利用

- 社会状況により素材ごとの分別により資源利用
- 地域循環のための社会システム
- ごみ処理の数値目標の設定 ●ごみ施策の見直し

住民との協働が欠かせない

- ごみ処理の場合と大きく違う ●まちづくりの一環

大木町の特徴的な取り組み

プラスチック類の分別から重油をつくる油化事業



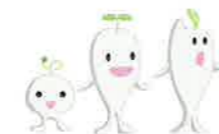
専用袋で分別されたプラスチックごみを回収



油化プラントに粉砕したプラスチックごみを投入



油として生まれ変わる



ブラ袋やバック・カップ類など、油に変えることのできるプラスチック類を住民の方達が分別を行ない、油を作る。作った油を公共施設のボイラー燃料として使用。

家庭からでる紙おむつ(大人・子供用)の分別



平成23年10月より全町内で開始。町内に50以上のボックスを設置し、常時出すことができる。集めた紙おむつは、民間業者により建築用壁材などに再生される。これは、日本初の試みとして注目されている。